

命有る限り忘れ得ぬ思い出

浮羽郡浮羽町

本松 敏子

「また会えるわね」「うんまた会いたい元気でね」とは続く言葉もなく涙が流れて止まらず、東と西に悲しく別れた。それは昭和21年8月20日の朝、忘れられない、また忘れてはならない舞鶴の港、引揚寮の朝の一コマです。

あれから戦後50年ずいぶんと便利な世の中になったとはいえ、東北と九州では未だに会うこともできず、自分の年を考えては昔が恋しく涙ぐんでは溜息ばかりです。忘れようと思ってもまるで昨日の事のように、今もはっきりと忘れることはできません。

時、昭和20年8月15日。当時私は昔の旧満州国海城県海城東部陸軍官舎に、そして主人達の部隊は錦縣という所に移動し、女子供ばかりでの生活の中終戦の声を聞いたのです。王道楽土と呼ばれた平和な毎日も、終戦という一大事により、一生忘れることのできない、悲しい、哀れな、苦しい、みじめな思い出。どうして忘れることができましょう。

終戦と同時に第一に水と明かりが止められ、昨日まで親切にしてくれていた現地人達がまるで手のひら返したみたいな行動に出たんです。官舎内に残っておられた2人か3人の男性方から、1戸に1人ずつの生活より4戸か5戸家族一緒に集まるようにとのことで、私達も子無し、妻が2人、3人の子持妻が1人と大きなお腹の妻が1人……毎日毎日が息を呑む様な生活が始まったのです。2、3人の男性に守られながら、現地人の集落まで水汲みに行くんです。都会で育った方々の中には、少し大きなヤカン1つもハアハア息の切れそうな苦勞です。こんな時、私は小さな時から農家育ちだったので6尺棒肩にホイホイでした。

色々な噂話が流れました。いつ迄つづくかも知れないこんな生活、誰も解りません。まず御飯がオカユに変わりました。お米を大切にのぼしたかったからです。

外に出て現地人との接触をできるだけ少なくするために、4戸続きの家で、室の中に隣に行く30cm位有るレンガ作りの壁に穴を空け、人が入って通れる所を作りました。毎日毎日を不安と戦いながらも、いつかは内地に帰れるという希望を持ちながら、敷布でリュックを作り、最少限度にまとめ帰る支度に懸命でした。そして良く帰る夢を見ました。そんなある日の夕方、現地人の襲撃を受け、用意してた荷物は全部持って行かれました。こんな思い出話今だから話せる事なのです。

それからどれくらい日がすぎた頃だったでしょう。海城に陸軍病院が有りました。そこに第108師団の部隊が集結していると話を聞き、その中に武装解除を受けた主人達がいたのです。4人の妻達の驚き、想像して見て下さい。会えたのです。でも「部隊は内地に帰るから大事にしてる品が有ったら持って帰るぞ」との言葉に一番好きな着物を2枚渡しました。そしてまた辛い別れを、でも先に帰るという事で、なんとなく、ほっとした気持ちも有りました。

そしてまた辛い冬を越し春が来て、大陸では春というより夏と冬です。赤ちゃんも生まれて

女の子でした。親も子も最悪の条件の中で本当に良く頑張ったのです。

嗚呼帰国の命令が！！6月30日午前10時頃「3時迄に駅に集合と」待つ待ちわびた唯ひとつの願いとして生きて来たこの知らせ、戦後そろそろ1年、どんなにこの日を待ったことだったでしょう。もうとうに帰る支度はできている。取るものも取りあえず急いだ。30分位小走りに。乗車する汽車は無蓋貨車に一杯あふれそう、自分のリュックに腰を下ろさねば場所が無い、満杯で誰も文句ひとつ言う人は無い。心なしか笑顔が浮かぶ。

6月30日海城出発後3時乗車6時、ところが指輪時計等々不都合が有るからはずすようにと。今思うと考えられない事だけど、みんな動く車上からポンポンと投げ捨てた。そして錦縣着が7月2日。宿舎は一杯で、子供の無い私達は、畳1枚より少しせまい位のアンペラ1枚で外で寝た。食事はコリヤン飯1杯ずつ買って食べた。いくらだったか覚えてない。トイレは大きな布、つまりフロシキみたいな物で友とかわるがわるに姿を包んで用を足した。

7月1日錦縣発午前5時、そしていよいよコロ島着。7月12日埠頭へ午前3時。乗船は午後4時。船名は貨物船V68号。7月13日出港午前6時。食事は汁物ばかりで、バケツを持って船の底から上迄取りに行かないと頂けない。

結局は元気な一人身の者が動かねば。元気な者同士お互いにはげまし合いながら。船内では御世話して下さる日本の船員さん達が、夕食後に「今内地でこんな唄流行してるんだよ」と。唄って下さったあの唄、リンゴの唄や「清水港の名物はー」と。7月17日入港。午後4時舞鶴の港に船が着いたのです。でも検疫のため、母国を前に上陸は19日午前5時。引揚者が泊る上安寮という所に午後4時入り。いよいよ明日故里へと思えば、今迄気安く一緒に生活して来た友との別れもまた辛くねむれぬ一夜でした。

明けて20日駅迄トラックで。ここでどこの方か知らないけど、大きなオニギリを一包み下さって「お腹空いているでしょう」と皆で一口ずつ頂き、アアこれが日本の味だとまた涙でした。

久しぶりに家へ。家族はみな元気で変わりないけれど、先に帰ったはずの夫の姿はなく、全く行方不明のありさま……そんな折、引揚げ後2ヶ月した10月に村役場の兵事係という方が、慎重に手渡された、一枚の書状それは一時も忘れられない夫の戦死の公報でした。義母とすべてを忘れ、気も遠くなりそうでした。まず落ち着きました。そして文面を確かめました。戦死は南方、月日は終戦前一緒に住んでいた月日で、私の口から元気だと申し上げ信じて頂きました。

夫の行方も解らぬまま姑や弟妹達との日々、農作業も母の命ずるまま絶対服従の嫁の立場でした。

この頃別れた友達との文通で、主人達がシベリア抑留という事がはっきりと知りました。田圃からの帰り道、空を見上げて夫の姿を浮かべ、出る溜息と涙ばかり。今、時折出して見る日記帳の文字も心なしか涙ぐんでるみたいです。

新しい年を迎えた昭和23年5月シベリア引揚げが開始され、その第一陣に、新聞紙上に夫

の名前を見つけました。この喜び本当にうれしかった。でも復員してきた夫は栄養失調で足腰の立てない病人になっていました。お医者様にはリヤカーに布団を敷き、上に寝せて私は何軒も行きました。現代ではお笑い草ですが、当時自家用車なんて田舎にはタクシーも無い時代でした。電話も病院とか大きな店にしか有りませんでした。でも元気になる迄1年半はかかりました。今夫が82才、私が75才。平和な農村で米作りや、柿作りに現役で頑張ってます。色々有ったけど今は最高に幸福です。今迄病知らずに来られたし、後何年生きられるか解らんけど若い人にも愛され、あわてない婆ちゃんになりたい。